

三位一体の主日

2011.6.19

ヨハネ 3・16-18

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたの一同とともにあるように。」今日の第二朗読で聴いた、コリントの教会への第二の手紙の結びのことばです。最初の教会の時代から交し合われてきたこの挨拶のことばを今私たちはミサの度ごとに、ミサの始まりを告げる司祭の挨拶のことばとして聴いています。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」「また司祭とともに」このような挨拶のことばを交し合うことによって、私たちはミサに招き入れられ、ともに感謝の祭儀であるミサを捧げています。

ミサは感謝の祭儀とも言われますが、ミサが感謝の祭儀であるのは、ミサに集う私たちがこのような挨拶を交し合う者たちとされたことへの感謝の祭儀であるからです。ミサにおいて私たちは、私たちの主イエス・キリストが私たちに与えてくださった恵みの数々に感謝をささげるのです。主イエス・キリストからの恵み、主イエス・キリストを通して示された恵みに感謝をささげるのです。主イエス・キリストを通して示された恵みとは、私たちと同じ一人の人間となって、私たちの中に来てくださった神であるお方が、この世に生きる私たちの全ての重荷とその重荷の下にある私たちの苦しみの全てを、自らの肉のからだをもって知ってください、ともに担ってくださいることによって示された神の愛の恵みです。神であるお方が、この世を支配する権力の残忍な横暴さの犠牲となって十字架に架けられることによって、神はどのような人々の中に、どのような人々ともにいて下さるかを示された神の愛の恵みです。そのことによって示された、支配する者たちとその支配の下に苦しむ人々との理不尽な人間社会のありようが、神の御眼にどのように映っているかを示す、神の裁きとしての愛の恵みです。一人の人として十字架の上に死なれた神であるお方の復活は、この世の支配の下に苦しむ人々への神の愛は、この世の如何なる支配の力にも打ち勝つことを告げているのです。

この世の社会の現実の中に生きる私たちへの神の無限の愛は、私たちの只中に来てくださり、私たちのために、私たちとともに、自ら十字架の死に至るご生涯を引き受けられた、神の子イエス・キリストにおいて示されているのです。

「神は、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」。という今日のヨハネ福音書のことばは、そのような神の私たちへの愛を語っているのです。

イエス・キリストの十字架において示された神の無限の愛の深みを悟るため

には、私たちもその中に巻き込まれている、この世の権力の無責任さと横暴によって苦しみの底に突き落とされている無数の、同時代を生きる人々の苦しみを知らなければなりません。その苦しみにしっかりと目を据えなければなりません。何時の時代も変わることのない人々の苦しみの只中で、人となられた神の子イエス・キリストは十字架に架けられたのです。その神の子イエス・キリストの十字架によって、この私たちの現実に対する神の裁きと、神の愛は示されたのです。

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」「また司祭とともに」という挨拶のことばをもって招き入れられた今日のミサにおいて、私たちはイエス・キリストの十字架において示された神の愛に包まれます。その愛のいのちそのものであるキリストの聖体をこの身にいただきます。私たちがその愛に包まれ、その愛のいのちをこの身にいただく、神の愛は、イエス・キリストの十字架において示された神の愛です。この私たちの現実の社会のありようを糾弾し、その社会の現実によって苦しみの底に追いやられた人々の苦しみに寄り添い、その苦しみからの解放をもたらそうとされる神の愛です。その神の愛に包まれ、その神の愛のいのちをこの身にいただくために、私たちはこのミサの集いに招き入れられたのです。

私たちがこのミサにおいて、今ここに働く聖霊によって心を開かれ、このミサにおいてささげられる神の子イエス・キリストの十字架の犠牲によってもたらされている恵みに気づき、そこに示されているこの世を生きる私たちに上に注がれている神の愛を受け入れることが出来るとき、私たちは真の交わりの世界に招き入れられるのです。

このような時代に直面している私たちが、今そこから立ち上がって行くために必要としているのは、苦しみの中にある者たちの、苦しみを通しての、それに打ち負かされない交わりであり支え合いです。私たちが今日ささげるこのミサが、そのようなところから出発し、そのことを祈り求める、私たちに示されている、主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりのミサとなることを願って祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高